

# 紀元前2千年紀エジプトの葬制の変遷を探る

## —ダハシュール北遺跡第29次調査(2023)—

矢澤 健 東日本国際大学エジプト考古学研究所 客員教授  
吉村 作治 東日本国際大学 総長・教授

## Investigating the Transition of Egyptian Burial Practices in the Second Millennium B.C.: The 29th Season of Dahshur North Project, 2023

YAZAWA, Ken Visiting Professor, Institute of Egyptian Archaeology, Higashi Nippon International University  
YOSHIMURA, Sakuji President/Professor, Higashi Nippon International University

紀元前2千年紀エジプトの葬制の変遷を探る—ダハシュール北遺跡第29次調査(2023)—

### 1. はじめに

古代エジプトの紀元前2千年紀に相当する中王国時代(紀元前21～前17世紀)と新王国時代(紀元前16～前11世紀)では、葬制の様々な側面で差異が見られ、この時期に古代エジプト人の死生観における重要な転換があったと推測される。発表者らは紀元前2千年紀における葬制の変化の特質とその背景を明らかにする目的で、2つの時代の墓が混在するダハシュール北遺跡を対象に調査・研究を実施してきた。過去の調査結果から、墓の時期や特徴は遺跡内の位置によって異なることが判明したため、2015年以降は調査地区が1、2年ごとに変更され、活動の年代幅や階層差、埋葬習慣の変遷過程など、遺跡の全体像の把握に調査の主眼が置かれた。

2023年は本遺跡調査の最初期に発掘が行われたイパイのトゥーム・チャペルの北側に調査区が設定された(図1)。この地点は遺跡内でも比較的高所にあつて見晴らしが良かったため、保安上の理由から見張り小屋が建てられていた。墓地としても好立地だったと推測されるこの場所には高位の人物の墓がある可能性が高いため、前年の調査時(矢澤・吉村 2023)に見張り小屋が他所へ移築された。2023年の調査では同地点において東西20m、南北10mの範囲(グリッド4E21、22)で地上部の発掘が実施され、計7基のシャフト(竪穴)墓が発見された(図2)。この内5基が発掘され、シャフト181、183は中王国時代の墓、シャフト182、184、185は新王国時代の墓であることが判明した。以下では両時代の墓について、特筆すべき成果があつたシャフト181とシャフト185に重点を置いて報告する。

### 2. 中王国時代のシャフト墓

シャフト181(図3)は開口部が南北2.6m、東西1.3mで、シャフト部の深さは6.5mであり、南側にA室が掘削されていた。A室は入口側が通路状を呈し、奥は西側に粗く拡張され、幅2.3mの方形の部屋が造りだされていた。通路も含めた奥行は4.2mで、天井高は1.2mである。シャフト底部は北から南に向かって低くなる形で傾斜しており、傾斜はA室の通路部に連続していた。通路部の天井は意図的に中央が削られており、ヴォールト天井を目指していた可能性がある。スロープ形の通路が使用された中王国時代の墓は、本遺跡では過去に例がなく、注目される。

A室は盗掘を受けており、内部からは人骨とともに人型棺もしくはミイラマスクの一部と推定される彩色プラスターの断片が発見された。出土した土器片の多くは中王国時代に年代づけられるが、断片的であるため詳細な時期を推定する手掛かりにはならなかった。また、木製のシャブティがシャフト部のA室入口前から発見されたが、新王国時代のもつと推測され、後世の混入である可能性が高い。

シャフト183は開口部が南北2.9m、東西1.4mで、シャフトの深さは8.6mであり、南側にA室が掘削されていた。A室は奥行3.6m、幅1.5mで長方形の平面を呈し、天井高は0.7mと低く、さらに床面はシャフト部より約30cm高かつたため、掘削の途中で放棄されたと当初推測された。しかし、A室の内部からは彩色プラスターの断片、金箔の小片、土器片が発見されたことから、この状態で墓として使用されたと結論づけられた。

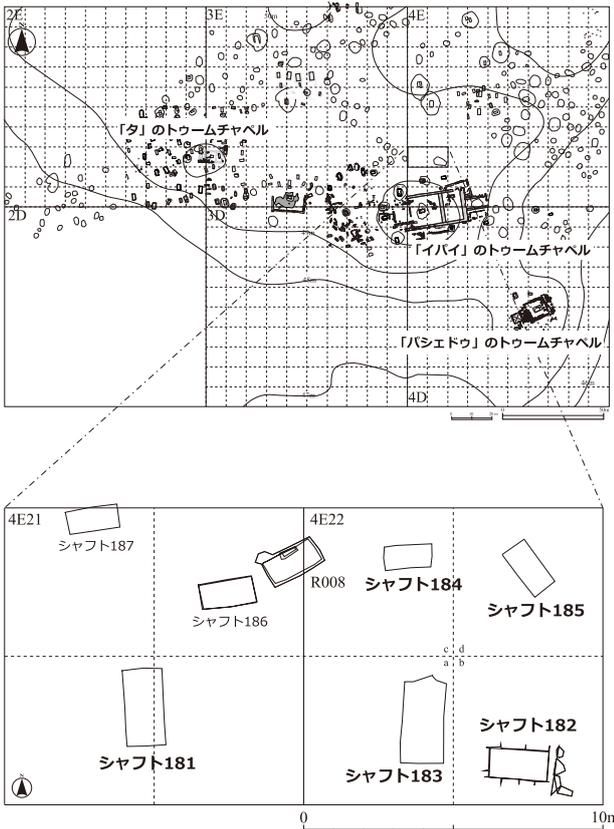


図1 ダハシュール北遺跡全体図と第29次調査区

### 3. 新王国時代のシャフト墓

新王国時代のシャフト墓の中で今期最も特筆すべき成果があったのはシャフト185である(図4)。シャフト185の長軸はほぼ北西-南東方向であり、開口部の平面は長辺が1.8m、短辺が0.9mの長方形を呈する。シャフト部の深さは8.9mで底部から南東側に方形の部屋(A室)が掘削されていた(図5)。A室は奥行4.2m、幅3.7m、天井高1.7mで、奥室(B室)が設けられていた。B室平面は奥行2.6m、幅2.5mの方形を呈し、天井はA室より一段低く、床面はA室より約30cm高く作られており、天井高は1.0mである。A室には下層に続く竖穴(図4のシャフト部2)があり、深さ3.1mで南東方向に部屋(C室)が設けられていた(図6)。C室平面は奥行2.9m、幅2.1mの長方形で、天井高は1.2mである。

シャフト185の盗掘は徹底されていた様子であり、残されていた遺物の大半は大量の木片と人骨片であった。さらに木製遺物の保存状況は極めて悪く、A室内部には腐朽によって分解された木材由来の褐色の粉が砂に混じって堆積していた。一方で、原形をとどめた木製遺物がわずかに残されており(図7)、人型木棺



図2 第29次調査発掘区(北東より)

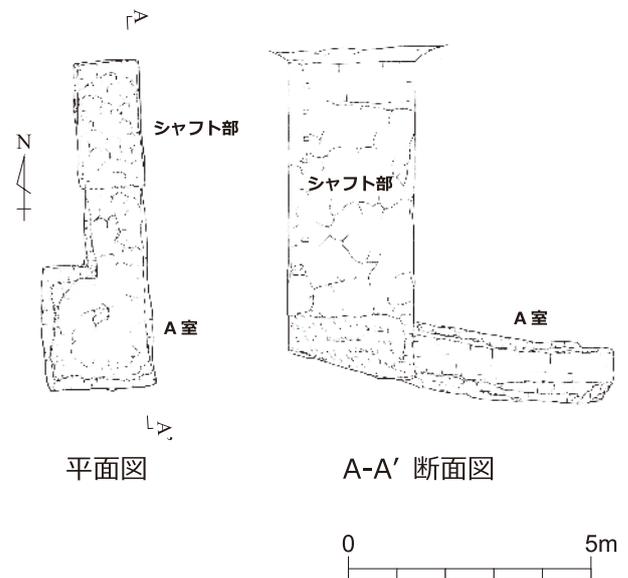


図3 シャフト181平面図・断面図

の顔や手の断片、足の裏面に該当する側板などが認められた。足裏の側板は表面が黒色に塗られ、赤の線でイシス女神の姿が描かれ、白い顔料で碑文が書かれていた。同じく人型木棺の部品として、本来顔部分に嵌め込まれていた眉や目の象嵌の一部が出土した。また、木製シャブティの断片が出土しており、黒色で書かれた横方向の碑文の帯が表面に認められた。以上は全てA室とB室から発見された。

A室からファイアンス製の指輪が1点出土しており、そのベゼルにはアメンヘテプ3世の即位名(ネブマアトラ)が透かし彫りで描かれていた(図8左上)。同じ寸法、形状のファイアンス製の指輪がテーベのマルカタ王宮遺跡から出土しており、現在アメリカのメトロポリタン美術館に所蔵されている(収蔵番号11.215.74)。寸法・形状が酷似していることから、これらはアメンヘテプ3世時代に同一の工房で製作され

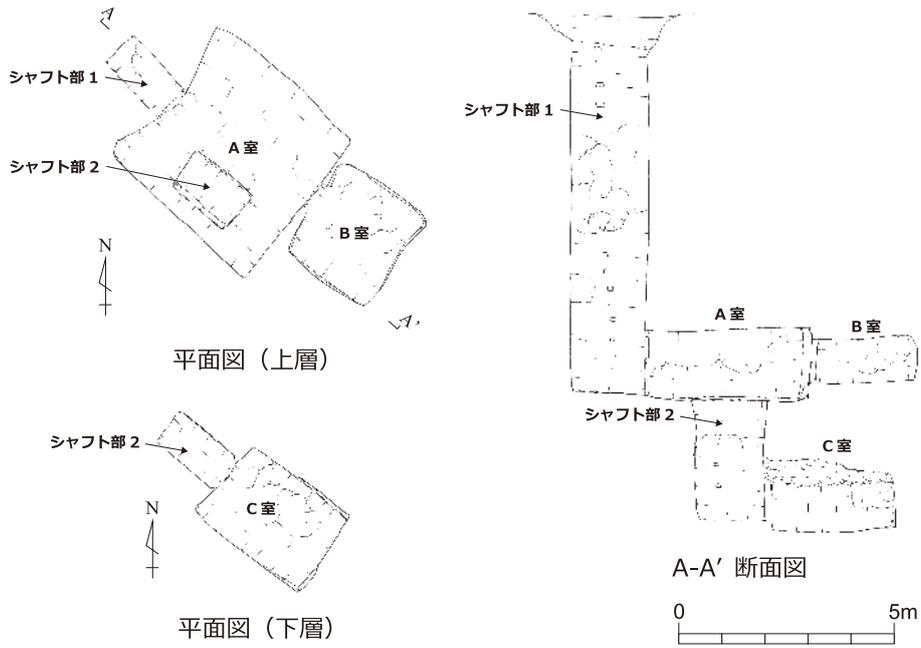


図4 シャフト185平面図・断面図

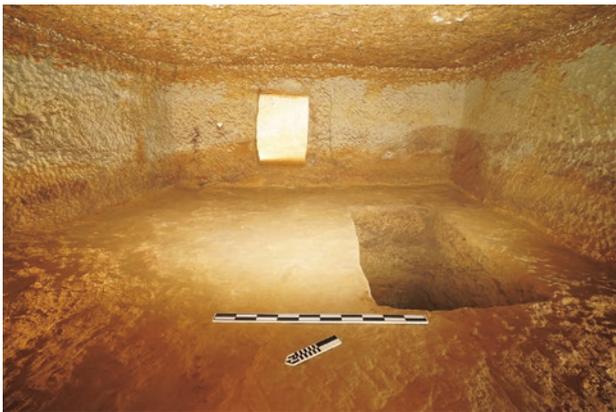


図5 シャフト185上層完掘後の状況(A室入口から奥を望む)



図6 シャフト185下層完掘後の状況(C室入口から奥を望む)



図7 シャフト185出土遺物(1)



図8 シャフト185出土遺物(2)

た可能性が高い。また、カエルを象ったファイアンス製のスカラポイドがB室から発見された(図8左下)。腹面にアヌクの文字が刻まれ、頭尾方向に穿孔がありビーズとして使用されたと解釈される。同形状の遺物がメトロポリタン美術館に所蔵されており(収蔵番号11.215.35)、同じくマルカタ王宮遺跡から発見され、アメンヘテブ3世時代に比定されている。以上の事実からこれらのファイアンス製品は、同王の治世におけるテーベと、ダハシュール北遺跡の位置するメンフィス地域との交流の証左として注目される。

シャフト185から出土した土器の中には、エジプト国外から輸入された土器が含まれていた。1つはカナーン・アンフォラ(図8中央)で、シャフト部1の底部付近、A室入口前でほとんどの破片が出土した。割れたカナーン・アンフォラがシャフト底部でまとめて出土した例は本遺跡のシャフト174でも報告されており(Yoshimura et al 2023: 41)、こうした出土状況は偶然ではなく意図的な活動の結果だった可能性がある。もう1つはベース・リングと称されるキプロスからの輸入土器で、シャフト部1からほぼ完形の状態出土した(図8右)。表面は灰色で、クリーム色の顔料で縞状の紋様が描かれていた。これらの輸入土器やその他のエジプト産の土器はアメンヘテブ2世治世からアマルナ時代に年代づけられ、上述のファイアンス製品の年代と整合的である。

この他のシャフト182、184については、出土遺物が乏しく大きな成果は得られなかった。シャフト182は長軸を東西方向にとり、深さ6.6mのシャフトで地下2層の構成を持つ。上層は東側と南側に部屋が掘削

され、下層は東西に部屋が設けられていた。西側の部屋は、西隣のシャフト183のシャフト部南東壁と接して貫通していた。遺物としては木棺片、彩文土器片、石灰岩ステラ片などが出土した。シャフト184は長軸を東西方向にとり、シャフト部の深さは5.0m、底部から西側に部屋が設けられていた。シャフト部の堆積から出土した陶製シャブティ以外、目立った遺物は見られなかった。

#### 4. おわりに

今期はイバイ墓の北側で発掘が実施され、この地点でも中王国、新王国両時代の墓の存在が明らかにされた。

中王国時代の墓に関しては、シャフト部と埋葬室がスロープ状の通路によって接続された墓が初めて発見された(シャフト181)。残念ながらこの墓が本遺跡の中王国時代の中でいつ頃に位置づけられるのか、被葬者はどの程度の階層に属する人間だったのかについては資料不足で特定に至らなかった。

新王国時代については、シャフト185の成果が際立っていた。埋葬の残存状況は悪かったものの、アメンヘテブ3世の即位名を持つ指輪と共に、その治世前後の年代を示す土器が相伴していた意義は大きい。この墓はダハシュール北遺跡における新王国時代の活動の中でも最初期に位置付けられ、当時の墓の形状や埋葬習慣を示す稀有な証拠となる。この資料は、JSPS 科研費21H00597「古代エジプト新王国時代のメンフィス編年の構築とテーベとの比較研究」(研究代表者: 吉村作治)の補助で進行中の、本遺跡の墓の資料

を元にした編年研究に大いに活かされる。また、指輪などのファイアンス製品の発見は、当時のテーベとメンフィス地域との交流の深さを示す根拠となり得る。これまでの本遺跡の調査成果は、両地域における埋葬の物質文化の変遷がラムセス朝期に分化していたことを明らかにしてきた。一方で、第18王朝後期の段階では両地域の物質文化は比較的同質だった可能性をシャフト185の成果は示唆している。同地区の調査の継続によって、更なる資料の追加が待たれる。

本研究は上述の研究費補助金に加え、MEXT 科研費18H05446「古代エジプトにおける都市の景観と構造」(研究代表者：近藤二郎)とJSPS 科研費19K01098

「古代エジプト中王国時代末期の王朝交替プロセスの解明」(研究代表者：矢澤健)の助成を受けて実施された。

#### ■参考文献

- ・Yoshimura, S., K. Yazawa, H. Kashiwagi, K. Takahashi, K. Takenouchi, Y. Yoneyama, S. Yamazaki and N. Ishizaki 2023 A Brief Report of the Excavation at Dahshur North: Twenty-Seventh Season, 2020, *The Journal of SHOUHEI Egyptian Archaeological Association* 10: 24-54.
- ・矢澤 健・吉村作治 2023「紀元前2千年紀エジプトの葬制の変遷を探る—ダハシユール北遺跡第28次調査(2022)—」『第30回西アジア発掘調査報告会報告集』65-68頁 日本西アジア考古学会。